

地域おこし協力隊とは、総務省が平成21年度から取り組んでいる制度で、都市部の意欲ある人材が地方へ移住(最長3年)し、地域力の維持・強化を目的とした支援活動を行うものです。

カメラを通して見える笠間の魅力



あらき みこ 荒木 弥子 隊員 30歳 東京都から移住



地域交流の撮影

昨年度は、栗の栽培や直売などの業務に加え、写真撮影の機会も多くありました。地域で行われている活動の記録や作家さんの作品撮影など、カメラを通して地域と関わる機会が増えたことで、これまでとは異なる視点で笠間の魅力を感じることができました。

私がカメラを始めたのは、大学受験を目前に控えた高校3年生の頃でした。元より作品表現に関しては興味があり、実際に形としてきたことはありませんでしたが、進路を考える中で、それまで触れてこなかった新しいことに挑戦したいと思ったのがきっかけです。無事に写真専門の大学に入学。最初は何を撮ればよいのか、どのように撮るのが正解なのかも分からないままカメラを手に取り、大学生活の4年間はほとんど写真とともに過ごしました。思うようにいかず、カメラが嫌いになりそうな時期もありましたが、振り返ると大学生活の中で最も時間をかけてきたのは写真を撮ることでした。

卒業後は、子どもと触れ合いながら撮影を行うカメラマンとして社会人生活をスタートしました。働いていたスタジオは一般的な写真館とは少し異なり、三脚でカメラを固定して撮影するのではなく、ハウススタジオと呼ばれる空間の中でカメラを手に持ちながら自由に動き回るスタイルでした。家のような自由な空間の中で子どもたちの自然な表情や動きを追いかける撮影方法は、モデル撮影に近いイメージかもしれませんが。

現在、協力隊としての活動の中でも、こうした経験が活かしていると感じる場面があります。例えば、地域の方々と小学生と一緒に農業体験の様子を撮影する機会があります。これは別の協力隊が中心となっている取り組みですが、その記録として撮影のお手伝いをしています。畑での作業を通して地域の方から話を聞いたり、初めての体験に夢中になったりする子どもたちの姿はとてもいきいきとして、カメラ越しに見ているのもその楽しさが伝わってきます。こうした瞬間を写真として残すことも、地域の活動を伝える一つの方法だと感じています。

また、市内の作家さんの作品撮影を行う機会もありました。笠間は陶芸のまちとして知られていますが、実際には陶芸だけでなく、工芸やペーパークラフト、刺繍などさまざまな分野で活動する作家さんがいます。作品を写真として残すためには、形や質感、色合いなどをできるだけそのままに伝えることが大切です。撮影を通して一つひとつの作品に向き合う時間はとても勉強になり、作品の魅力をどのように写真で伝えるかを考える貴重な経験にもなりました。

2月に行われた活動報告会では、「同年代の方との交流が少ないのではないか」というご意

見をいただきました。普段の活動では地域の方々と関わる機会が多くありますが、同年代の方とのつながりはまだ多くないかもしれないと改めて感じました。一方で、作品撮影を通して出会う作家さんの中には比較的若い世代の方も多くいらっしゃいます。今後はそうしたつながりをきっかけに、同年代の作家さんたちとの交流も広がっていったらと考えています。

作家さんにとって一番大切なのは作品づくりの時間です。だからこそ、その魅力を伝える部分で少しでも力になればと思っています。写真を通して作品の質感や雰囲気より伝わりやすくなり、撮影した写真を広報や発信に活かしたりすることで、作品の魅力がより多くの人に届くお手伝いができれば嬉しく思います。

地域おこし協力隊としての活動も最終年度を迎えます。これまで関わってきた活動に加え、写真という得意分野も活かしながら、地域の人や活動、そして作品の魅力を伝えていける一年にしていきたいと思います。



陶芸作家さんの作品



フェイスブックもご覧ください

問 企業誘致・移住推進課(内線592)